



こやの里だより

(第4号)

令和5年 6月1日(木)
兵庫県立こやの里特別支援学校
校長 石川 勝己

「遊びの活動を通して」

小学部長 川次 怜史

今年度小学部は1年生30名、転入生4名を迎え、訪問教育の児童も含め全学年で157名の児童数となりました。新型コロナウイルス感染症も5類へと移行し、今後、活動制限は少なくなっていくと思いますが、引き続き児童の安全安心を第一に活動に取り組んでまいります。

小学部では遊びの時間を大切にしています。グラウンドや中庭での外遊び、室内での遊びと遊ぶ中で子供たちは様々なことを学んでいきます。例えばブランコ遊びでは、順番を待つ、10数えたら交替する、「かわって」「ありがとう」のやり取りをする、ブランコに乗りバランスを取りながら足を動かす等々、一見何気に遊んでいる中にも生活につながる大切な学びがたくさんあります。その中で「楽しかった」「もっとしたい」という気持ちを友達や教師と共感し、新しいことに挑戦する力、人とかかわる力を育てていきたいと思っています。

子供たち一人一人のがんばりを認め、喜び合いながら保護者の皆様と共に、成長を支えてまいります。

今後ともご支援ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

「ありがとうは笑顔を作る魔法の言葉」

中学部長 今井 成幸

今年度は、訪問教育の生徒も含めて、3学年合わせて106名となりました。1年生も入学して、2か月がたち、学校生活に少しずつ慣れてきたと思います。2年生、3年生も進級し、成長を感じます。

新型コロナウイルス感染症も5類へと移行し、制限が緩和され、学校生活も4年前の日常を取り戻しつつあります。例えば、音楽では、「歌唱」が一定の条件のもとで、可能になりました。コロナ渦では、本校の校歌は聴くことが学びの中心でしたが、歌うことが可能になり、友達の歌声を聴いたり、みんなで歌うことで、楽しさを少しずつ味わうことが、できつつあります。

さて、中学部は学部目標で「自分と仲間を大切にし、ともに学びあい、成長できる生徒」としています。コロナの制限も少しずつ緩和され、授業や学校生活においても、友達とのコミュニケーションやふれあいを通して、お互い成長してほしいことを念頭においています。

人間同士のコミュニケーションの中で、「ありがとう」という言葉がよく出てきます。語源を紐解くと、「ありがとう」は「有る事難し」、つまり「当たり前ではない」「あり得ないような素晴らしいこと」という意味合いを持っています。自分がこの世に生を受けたことも、毎日ごはんが食べられることも、目の前の人と出会ったことも、当たり前のようであり、実はすべて奇跡のような素晴らしいできごとなのです。だからこそ尊いのだと思います。自分が言われてうれしいことは、他の人も嬉しいですね。そして、自分がつらく悲しい時こそ、この魔法の言葉は大きな効果をもたらすのではないのでしょうか。

たった5文字の小さな言葉。しかし、そこにはとても強い力が込められていると思います。

○落とした消しゴムを拾ってもらった ○重いものを運ぶのを手伝ってもらった ○しんどい時に助けてもらったなど「ありがとう」がたくさんある日は、幸福な日だと思います。

子供たちと共に学校生活を送れることを感謝しつつ、日々の指導に尽力してまいります。

今後ともご協力のほど、よろしくお願いいたします。

